氏　　名　木越義則（きごしよしのり）
学位(専攻分野)　博　士（経済学）
学位記番号　経博第322号
学位授与の日付　平成20年1月23日
学位授与の要件　学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻　経済学研究科経済システム分析専攻
学位論文題目　近代中国における貿易物価と市場構造

論文調査委員　（主査）教授 堀　和生　教授 大西　広　准教授 渡邊純子

論文内容の要旨

これまでの近代中国貿易史研究は，銀の受給動向と一般貿易物価水準の関係という貨幣価値変動の問題を中心に分析が進められてきた。本論文は，貨幣価値変動の問題から離れ，貿易物価を商品類別，産業類別，地域別に推計することで，貿易財の相対価格と数量の変化が近代中国における国内外の遠隔地間流通の構造に及ぼした影響力を分析することを課題とする。

第1章では，銀の購買力低下が近代アジア貿易圏の成立を促したという見解を批判的に検討し，対アジア貿易よりも対欧米貿易の数量成長の拡大をもたらした点を明らかにする。銀価低落は，付加価値が高い茶・絹にかわって，これまで欧米までの長距離輸送コストを補填できなかった商品の規模と種類を拡大させた。その結果，19世紀末から20世紀初頭にかけて，中国の遠隔地間流通は，それまで上海を国内外の結節点とする構造から，産地に近い開港場が直接に世界市場と結びつく程度が高まる方向に転換していった。

第2章では，19世紀後半期に茶・絹にかわる一次産品輸出港として台頭した天津を事例に，その遠隔地間流通の変容と貿易物価の関係を検討する。天津の貿易数量は，貿易物価がデフレから長期インフレに転換する1880年代から爆発的に増加した。あらたな輸出産品の開拓は，一度は上海を中心とする国内貿易の結合を強めたが，20世紀初頭から天津は日本，アメリカの価格変動の影響をより受けるようになり，中国という国民経済単位での結合は相対的に弱まる傾向にあった。

第3章では，対外貿易と国内貿易の結節点としての地位を相対的に低下させた上海が，工業化を梃子に，国民経済単位での市場の凝縮力を高めてゆく原動力になった点を明らかにする。第一次大戦を契機として上海の貿易物価は農工間比価を広げ，工業品高・原材料安となった。ヨーロッパからの工業製品の供給低下とあいまって，上海は，それまでの欧米向けの一次産品を利用して工業品を製造し，それを国内市場に向けて販売しはじめる。世界恐慌，銀危機の波及は，世界市場での価格競争力を低下させ，上海を頂点とする国内垂直貿易の構造をより強める作用を果たした。

第4章では，上海の工業生産力の基盤となった関内の市場構造を検討し，国内市場の凝縮力の高まりは，長江流域の一次産品生産の活性化によって支えられていた点を明らかにする。「満州国」の成立による東北地域の喪失は，東北と関内間の商品の流れを著しく減少させた。それは，長江流域で東北地域の特産品の代替生産を活性化させ，上海（工業品）―長江（原材料）―華南（消費財）という三者の社会的分業の深まりをもたらした。その構造は，日本軍が長江流域の要衝である漢口を陥落させるまで維持されていた。

以上の各章の分析を通じて，近代中国における遠隔地間流通の構造は，さまざまな外的・内的要因が貿易財の相対価格に波及することによって，大きく転換を遂げてきたのであり，相対価格の変化が中国の国民経済としての市場の凝縮力も一定程度方向づけていた点をしめす。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

近代中国の経済発展を長い時間的スパンのなかで明らかにしようという視角は新しい研究潮流である。その様ななかにおいて，本研究は近代中国で豊富な数値データを含む海関統計から作成した貿易物価指数を駆使することによって，その課題に正面から取り組んだ意欲的な労作である。

本論文が成し遂げた主な成果として，評価すべきは以下の４点である。

第１は，長期にわたる中国物価指数を作成したこと自体である。著者は，1869年から1942年までの74年間の中国海関統計をとりあげ，数十万におよぶ貿易データをコンピュータに入力することによって，巨大なデータベースを独力で構築した。さらに，戦前期の著名な南開大学指数を始めとする既存のいくつかの中国貿易物価指数をとりあげ，それぞれのデータ処理の次元まで深めた再検討と批判をおこなったうえで，新しい物価指数を作ることを試みた。こうして，1874－1942年の全中国，1874－1942年の上海，1874－1940年の天津，1932－1942年の関内全海関の物価指数，等を完成した。資料的にも手法のうえでもより高いレベルに到達したこの中国物価指数の構築は大きな学術的な功績であり，今後中国経済史の基礎的なツールになるであろう。

第２は，19世紀後半から半世紀におよぶ銀価格の下落が，中国貿易に与えた影響についての論争に，一応の決着をつけたことである。金に対する銀価格の相対的下落が中国の対欧米輸出を促進したという古典的な見解に対し，様々な疑問がだされてはいたが，学界として共通の認識に至っていなかった。本研究は金銀比価と為替相場，中国の対金貨国輸入，銀銭比価，輸出物価，銀の輸入量，主要輸出品の受給動向，等を数量的に分析することによって，銀の下落が中国の対アジア貿易を拡大したのではなく，それは対ヨーロッパ貿易の拡大を引き起こしたという事実を確定した。

第３は，貿易物価指数と貿易数量指数を駆使することによって，中国最大の工業都市上海の経済発展の特徴を解明した。従来は海関統計はもっぱら外国貿易の資料として使われていたが，本論文では国内貿易と結びつけることによって，仲継貿易地と国内工業の中心地という都市上海の二重性を明らかにした。さらに，名目価格ではない数量指数での分析によって，1920年代末まで上海はもっぱら対国内貿易によって発展していたが，30年代に次第にその優位性を失っていった事実を明らかにした。

第４は，1930年代すべての開港場の貿易物価指数と数量指数を作成分析することによって，同時期の中国遠隔地交易の動向，市場形成のあり方等を明らかにした。従来は全国市場の狭隘性を示すものとして使われていた開港場間の貿易を，本論文は外国貿易の趨勢と結合して検討することと，膨大な資料の統計分析により，新しい知見をひらいた。本研究によれば，この時期に開港場間は相互依存関係を強める様になっており，満州を喪失した分だけ関内の市場関係は拡大していた。そして，このような揚子江流域を中心とした社会的分業の拡大こそ，南京国民政府が推し進める国民経済形成の基盤であったと展望している。

この様に大量データの処理による本研究は様々な成果をおさめているが，問題がないわけではない。第１に，表題に市場構造を掲げているが，内容は遠隔地貿易の分析のみであり，市場の制度や商人・金融機関などの主体が論じられているわけではない。第２に，貿易研究に専心したあまり，それ以外の分野の経済史研究の成果との整合性について考察がつめられていない。第３に，タイル尺度を使っているが要素分解の分析をしなければ積極的な意味がないのではないか，あるいは市場変化のあり方をそもそもタイル尺度によって検出できるのか等，統計学の見地からはいまだ検討すべき点も散見される。

ただし，これらの問題点は今後著者本人の研鑽と著者を含めた研究者達による実証研究の進展によって解明されていく学界全体課題であるともいえ，現時点において本論文がなしとげた学術的貢献をいささかも損ねるものではない。よって本論文は博士（経済学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお平成19年12月14日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。